

かすみ草のおねえさん

俵 万智



文藝春秋

かすみ草のおねえさん

俵

万智



文藝春秋

かすみ草のおねえさん

一九九四年七月十五日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者 俵 万智

発行者 堤 堯

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—三三

郵便番号 一〇二

電話番号 〇三—三二六五—二二二

印刷 株式会社理想社

付物 凸版印刷株式会社

製本 矢嶋製本株式会社

© Machi Tawara 1994 Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取替えいたします

ISBN4—16—349060—4

かすみ草のおねえさん * 目次

1 二十七歳のターニングポイント 11

わが師の恩 12

久しぶりの学校 16

気持ちの旬 19

「青春」 21

「本業以外で誇れる技術」——わたしの場合 23

仕事の周辺 27

事務所 27 教材選び 29 日曜美術館 30

伊勢物語 34 朗読会 35 第二歌集 36

教師を辞めて 38

出会いと別れ 38 メインテーマ 41

三時のお茶 44

My 27th 46

教室の外で読む古典 49

教務手帳 53

尾崎豊の詞、そして死 55

一日郵便局長 31
ワープロ 32

かすみ草のおねえさん 7 1

花は……。 7 2

時計五話 7 4

初めての腕時計 7 4 いつのまにか 7 5 時計占い 7 6

思入れ 7 7 ベルト 7 8

絵はがきの楽しみ 7 9

父の転勤 8 1

一枚の自画像 8 6

読書日録 8 9

地球の話 9 4

心の虹 9 7

プロの将棋 9 9

いい顔 10 1

相撲体験 10 3

「ハイテク日記」の行方 10 5

エリーゼのために 10 9

アンが教えてくれたこと 11 2

映画「風の又三郎——ガラスのマント」 117

画家の言葉 121

かすみ草のおねえさん 127

四ッ角の風景 130

テレビと私 133

不思議なカタログ 135

花を見つめる 137

3 言葉が大好き 139

私の好きな春の言葉 140

辞典の思い出 142

たそがれ 145

オンチュウのこと 147

言葉の鎧 149

「こだわる」にこだわる 151

方言のクッション 153

方言のやさしさ 157

4

屋上から見えるもの 159

ボジョレー・ヌーボー 162

鷹羽狩行の一句 164

飯田龍太の一句 166

ワープロを使って 168

クイズ「伊勢物語」 172

パソコン通信と「まふまふ言葉」 175

はじめに、ことばありき 181

都市の表情 183

カルカッタ 184

恋人のような街 186

ロサンゼルス 189

井の頭公園 192

新宿 194

東京 196

福井の春 199

若狭の祭り 201

5 につぼんの色 207

若草色 208

五月の空 211

くろらく 214

それぞれの白 217

さくら貝 220

紅白 223

竹 226

稲 229

墨 232

うるし 235

きつね色 238

ポスト 241

あずき 244

たたみ 247

つけ 250

青梅 253

金魚 256

日本酒 259

6

愛を語ろう 263

失恋 264

ハートストリート 266

シチューの恋 266 寂しい自由 268 「ありがとう」の距離 269 友たち 271

プレゼント 273 沈黙の恐怖 274 留守番電話 276 待つ 278

過去のこと 279 名前 281 電話の向こう 282 恋愛の「もし」 284

テンション 286

結婚を迷う私たち 288

ご婚約のニュース 295

かぐや姫の選択 299

さらきらひかる 303

拝啓 智恵子様 306

短歌の部屋 3 1 3

わが歌まくら——石狩湾 3 1 4

二十四歳の遺歌集 3 1 7

中庭につどう女たち 3 2 1

カンチューハイから六年 3 2 6

第二歌集ができるまで 3 3 0

おとうとの椅子 3 3 4

二十一世紀の短歌 3 3 7

あとがき 3 4 1

初出一覧 3 4 3

かすみ草のおねえさん

装幀 安野光雅

1

二十七歳のターニングポイント

わが師の恩

「もしもし、神奈川県立橋本高校の校長の宮田一郎といいますが、俵万智さんですね？」

電話を受けとって、どきんとした。神奈川県教員採用試験に、とりあえず合格したものの、赴任先は未定だった。新採用者は、県で赴任校が決められると、その校長から直接連絡があると聞いている。その電話なのだ。

数日後、内定の最終確認ともいべき校長面接を受けるため、私は初めて橋本高校の門をくぐった。

「失礼いたします」と、校長室へ入り、顔をあげたところで、宮田先生と目が合ってびっくり。

「あ」

「あ……あれ？」

本来なら、はじめましてと言うところだが、はじめましてではなかったのである。

「あなたは、たしか、二次試験の面接で私が質問をした……」

「は、はい」

神奈川では、一次試験の筆記の後、面接官三人による二次試験がある。宮田先生は、私の面接官のお一人だったのだ。

あとで伺ったところによると、先生は大変いい点をつけて下さったそうで、さかのばれば、これがご恩とご縁の始まりである。

面接のときから、私が「心の花」という短歌の会で、歌を作っていることは話題になった。

『心の花』を創刊した佐佐木信綱の歌を五首、この場で言えますか?——というような質問をしていただいたおかげで、だいぶ点をかせぐことができたのである。

教員一年生としての生活がスタートして、数ヶ月たった頃、私は再び校長室へ呼ばれた。

「どうですか、慣れましたか」というような雑談のあと、ちょっと真面目な顔をして言われた言葉を、今でもありありと思い出すことができる。

「短歌は、作っていますね? これはどんなに忙しくても、続けてほしいと私は思っています。文学を教え、伝えていく者が、創作に関わることは、大変大事なことだし、国語の教師としてプラスというばかりでなく、あなた自身のために、がんばってほしい。何十年後かに、国語の教師として、神奈川に俵万智あり、と言われるようになってほしいのと同時に、歌人としても俵万智あり、と言われるように……」

二十二歳のコムスメには、何十年後の話というのは、ちょっとピンとこなかった。が、とにかく

く一人前の教師として、そして歌人の卵として、宮田先生が自分に話してくださるのが、嬉しかった。特に、短歌を作ることを励まされて、おおいに勇氣を得た。

二年後、念願の第一歌集『サラダ記念日』を出版することができたときにも、本当に我が娘のここのように喜んでくださった。

思いがけずこの歌集がベストセラーになり、学校へ取材が殺到したときのことを考えてみると、まことに寛大な校長先生であつたなあと、あらためて思う。一般的には、学校というのは、マスコミの取材が入ることを嫌がるものらしい。が、宮田先生の場合は、「うちの学校に、こんな素敵な本を出した先生がいるんだということは、とてもいいことですから、授業や校務に差し障りのない範囲でしたら、喜んで協力しましょう」というのが基本方針だった。

その後さらに歌集は売れ続け、「ブーム」や「社会現象」と言われるまでになつてしまった。ふと気がついてみたら、むちゃくちゃなスケジュールと学校とを両立させることが、自分の日常になつてゐる。

秋、修学旅行の引率を間近にひかえていたころ、再び校長室に呼ばれた。

「最近はどうですか？　ちゃんと睡眠はとれていますか？　修学旅行は重労働ですから、健康管理には特に気をつけてくださいよ。——それから、このごろ世間のかたから、手紙や電話をよく貰うんだが……まあ要するに、教員があんなに華やかにマスコミに出るのはけしからんという……。私自身は、あなたの生き方を規制する気はないし、歌人としての成功を心から喜んでゐる。ただ、こうなってくると、いろんなことを言う人が出てくるのは確かなんです。それみたことか、